

母親の上で安心しきって、休息する子クジラ。母親は常にこちらの様子を伺っていた



創刊号・クジラと泳げる海スペシャル

## Part I

南太平洋

トンガ王国のザトウクジラ

今まであちこちの海でザトウクジラの撮影を行ってきた。

しかし、これほど近くで、

こんなに長い時間ザトウクジラの親子に

遭遇できた海はなかった。

ブリーチングにベクトラルスラップ、スパイホップ。

大型鯨類の中で、一番アクロバティックな

行動を見せてくれるザトウクジラ。

ダイバーにとっても一番馴染みのあるこのクジラを、

水中で、しかも目前で見れる可能性のある海があった。

南太平洋唯一の王国トンガ。この海は凄い!

Special Thanks West Australia Travel & Dive Centre

クジラの王国トンガ

# The Great White Wings

Photo&Text  
Takaji Ochi

[www.web-lue.com](http://www.web-lue.com)

創刊号 クジラと泳げる海スペシャル 南太平洋・トンガ王国のザトウクジラ

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Web-lue 2005. spring



激しく水面をたたくベクトルスラップ

## The Great White Wings

# クジラ水中遭遇条件の良い トンガの海

学名に「大きな翼」という名前を冠するザトウクジラ。鯨類最長、約3mの長さを誇る胸びれが、海中を舞う巨鳥のように優雅に見えることからつけられたのだろうか。最近では多くの地域でこのザトウクジラとのスイミングが規制される中、トンガ王国のパバウ諸島は、一般のウォッチャーでも普通にクジラとのスイミングが可能な、世界でも希少な場所でもある。

2004年8月、約3週間の日程でパバウ諸島に滞在。水中でのザトウクジラ撮影を行った。実際には、合計で17日間海に出て、水中でクジラの撮影に成功したのは14日間。天候不良などで海に出れなかった日は4日間。海に出た日でクジラの水中撮影に成功した確率は82.3%。海に出れなかった日も合わせると66.6%。これは「ザトウクジラ撮影」としては、かなり高い遭遇率であると言えるだろう。

今までパバウに来たことのある海外の水中カメラマンなどに聞くと、僕の遭遇率が信じられないと口々言う。現地でも、撮影から戻ってきた僕に、ホエールウォッチングを行っているセーリングサファリのNZ人オーナーのジョンが「今日はどうだった？」と聞くのに対して、「今日も凄かった、凄く良かった」と連日答えるので、「お前は良くなくても良かったって答えるんじゃないのか？普通、カメラマンは毎日今日もダメだった、昨日もダメだったって言う奴ばかりなのに」と呆れられてしまった。何度かこの海に来たことのある友人のアメリカ人水中写真家、トニー・ウーにも「タカジの経験した事が普通だと思っただけじゃない。それはかなりラッキーだ」と言われた。

しかし、世界中のプロ水中カメラマンがこぞってこ

の海にザトウクジラの撮影に訪れていることは間違いない。他の海に比べて、海中の透明度の高さ、風が吹いたとしても、その風を遮ってくれる複雑な島の地形など、ホエールウォッチングをする上で好条件がそろった海でもある。今まで、ハワイ、西オーストラリア、ドミニカのシルバーバンク、ケラマ諸島などでクジラの撮影にチャレンジしたが、どこも基本的には、外洋で、撮影コンディションとしては難しい場所が多かった。自分が行った事はないが、訪れた人からタヒチのルルトゥの話しを聞く限り、やはり風を避けるために好条件の地形では無いようだ。それに、全ての場所が水中でクジラ撮影が可能なのではなく、船上からの撮影に限られる場所もある。

それに比べて、パバウでは、入り組んだ島々の間で子供を休ませる親子に良く遭遇した。親子でなくても、長い島と島の間を通る海峡に出現する事も多く、地元のルールで、1度の入水は4人までと限定されているが、水中での接近も認められているし、とにかく遭遇条件は今まで訪れた中では最高と言っても過言では無い。



チャーターに使われるホエールウォッチングボート

子クジラは、「ぶつかる!」と思う距離まで接近してきた

好奇心旺盛な子クジラは  
ゆっくりと真正面から近付いて来た



The Great  
WhiteWings

この親子は、ほとんど動かず、1日中同じ海域に留まり続けていた



## クジラの神々しい眼差しで見つめられると、 全身に電流が走るような 震えを感じた

### The Great WhiteWings

ババウに到着してボートに乗り込んだ早々、一番最初に遭遇したのはハシナギルカの群れと一緒に泳ぐザトウクジラの親子。ハシナギルカたちが親子の周囲をグルグル泳いでいるのが船上からも確認できた。翌日、出産間近の妊娠クジラに遭遇した。通常、大人のザトウクジラは一度潜行するとかなりの時間潜ってしまうのだが、このクジラは呼吸が不規則で、一度潜行しても、すぐに浮上してくる。傍らには、つねにエスコートがついていた。出産直前のクジラには、出産経験のあるメスクジラがエスコートにつくとされている。ほんの少しの間だが、水中でも観察することができた。

多くの場合、接近が可能なのは親子。島々に囲まれた穏やかな海域で親子に遭遇した。生まれたばかりの子クジラを連れた母クジラは、接近するダイバーを警戒しながらも、体力の無い子クジラを少しでも休ませようとするのか、時には、同じ場所から1日中ほとんど動かないこともあった。数隻のウォッチングボートがやってきて、入水したにも関わらず、この親子はこの日1日中ずっと同じ海域に留まり続けた。穏やかな水面に浮かび、小クジラを頭上に乗せて休ませる母親。子クジラは安心しきったように母の上で甘えていた。撮影のために近付くと、母親はずっと視線をこちらに向けて様子を伺い、接近しすぎると、クジラ類最長の



外洋にいる親子には、ほとんどエスコートがついていた

長さを持つ胸びれを静かに動かして、「それ以上近付かないでね。赤ちゃんが驚くから」とでも言わんばかりに、距離を取るよう促す。しかし、動こうとはしない。水面に浮いたまま接近すると、警戒するようにこちらの様子をじっと伺っている。間近で、あの神々しい眼差しで見つめられると、感動と緊張で全身に電流が走るような震えを感じた。アングルを変えようと、少し水中に潜ったのだが、その瞬間に母クジラが面倒くさそうに身体を翻して移動を始めた。しかし、しばらく動くとまた水面

に留まって、子クジラを休ませていた。

また別の親子に遭遇、母親が水中で停止している間、呼吸の短い子クジラだけが浮上してきて、水面で一人遊びをしていた。静かに接近すると、好奇心旺盛な子クジラはカメラレンズ目がけてゆっくりと真正面から近付いて来た。「ぶつかる！」と思った瞬間に右にそれて、右目でレンズを覗き込んだ。いくら子どもとはいえ、体長は4m以上ある。何度かこういう経験をしたが、慣れるまでは緊張した。この親子には、滞在中3回も遭遇した。しかもほとんど同じ海域。親近感もわき、「名前でもつけようか」とガイドと話していたのだが、すでにオーストラリア人のゲストが、初めて自分の子供がクジラと泳いだ記念にと、子供の名前をその子クジラにつけて呼んでいたのを、諦めた。



テールに触れてしまえるくらいの距離まで接近してしまった

## 水中で 60個体以上の クジラに遭遇

メイティングポッドとは、1頭のメスをめぐって、交尾を狙う数頭のオスが群れをつくりメスの後を追いかけている状態の事。「ぶふお！ぶふお！」と噴気を吐きながら激しくメスを追いかけるシーンは、船上から見ても迫力が有り過ぎて、最初は海中に入るのを躊躇した。海中にいても、オスたちが激しく絡み合いながらメスを追尾していく様子を観察できる。真横をかすめるように通過していく時など、尾びれのひとかきで巻き起こる水流が「ぶわっ！」と僕の体全体を包み込んだ。すでに何度も水中でクジラと遭遇していたとはいえ、それほど近くで見るとやはり緊張で体力が入った。

外洋で、エスコートのついた親子にも何度か遭遇した。トンガのような繁殖海域では、親子にオスがつき従うことがある。実際には、メスとの交尾を求める行動と

言われているのだが、ある日、外洋性のサメが生まれたばかりの子クジラを狙いに現れた時、このエスコートが間に入ってテールスラップなどをして威嚇行動を見せていたようだ。また、撮影のため、近くまで接近しようとした僕と親子の間にも割って入り長い胸びれを垂直に僕の目の前に突きつけて、「これ以上近付くなよ」と警告するような行動を取った。おそらく、それぞれの個体の性格もかなり違うらしく、絶対に親子に近寄らせてくれないオスもいれば、まったく親子をガードしようしないオスもいた。

滞在期間中、遭遇したクジラの数を実数でカウントしてみた。ボート上から近くまで接近できたのが約100個体、水中で遭遇、あるいは撮影できた個体は60個体に達した。あまりに毎日、しかもかなり長時間遭遇できてしまうので、滞在後半くらいからは、まるで伊豆半島の海で

ダテハゼでも撮影しているのではないかと思うくらい、目の前にいる事が当たり前のようにクジラに対していたような気がする。実際に、親子のクジラがじっとしているのに「今日はもういいよ。帰ろう」とガイドに言って引き上げてしまった事も何度かあったほどだった。

### 今年のトンガ、ホエールスイム&水中撮影ケジュール

今年(2005年)の8月も約1ヶ月に渡ってこの地に滞在し、ザトウクジラの撮影を行う予定だ。西オーストラリアのバースにある旅行社、西オーストラリアトラベル&ダイブセンターの高島氏との協力で行うチャータートリップも開催する。詳しくは西オーストラリアトラベル&ダイブセンターの高島氏まで。越智隆治も現地での質問など、可能な限りお答えします。

The Great  
WhiteWings



(上)週末のバーでは、ダンスなど様々なイベントが開催される(中)港には、バーやダイビングサービスの看板が並ぶ(下)国内線は、かなり年代ものの飛行機が使用されている↓



トンガ人は敬虔なクリスチャンが多く、週末は教会にでかけてくる

# 南太平洋唯一の王国、トンガへ。

## トンガ王国 ババウ諸島

南太平洋上に浮かぶトンガ王国は、南緯15度～23度30分、西経173度～177度に位置し、約170の島々から成る島国国家。南太平洋で唯一の王国でもあります。群島は北から南へババウ、ハアパイ、トンガタブの3つのグループから成り、陸地の総面積は日本の対馬とほぼ同じ広さになります。首都はトンガタブ島のヌクアロファ(人口約3万4千人)。中、南部地域は、サンゴ礁の島が多く、平たんな地形であるのに対して、北部地域は、火山のある山岳地帯を持つ島々が目立ちます。

ザトウクジラと泳ぐのは、そんな山岳地帯を持つ、ババウ群島。首都のヌクアロファからは国内線の飛行機で約1時間30分の距離。ババウ島はマリンスポーツの中心地として、フィッシング、ダイビング、ホエールウォッチングなどの旅行者が訪れています。島の人口は約1万人弱。島の中心は世界中のヨットが集まってくるネイアフの港町。ここでは、8社だけが政府からホエールスイミングの許可をもらっていて、観光客にクジラスイミングツアーを開催、ホエールウォッチングポートもこの港町から出港します。しかし、まともに機能しているのはそのうち半分しかありません。

ザトウクジラたちがこの島にやってくるのは、毎年7月～10月頃。南極から北上し、この海で出産、子育てを行っていて、その数は、定かではありませんが、推定250～750頭とされています。ネイアフの入り組んだ入り江から、クジラたちが生息する海域まではポートのスピードにもよりますが、約20分～30分程。

# The Great White Wings

## アクセス

トンガ王国の首都、トンガタブのヌクアロファまでは、日本からニュージーランドのオークランドを経由する。オークランドまでは、ニュージーランド航空で成田から同じNZのクライストチャーチ経由で約12時間。オークランドからヌクアロファまでは同じニュージーランド航空で約3時間。しかし、オークランドでのトランジット時間が約10時間と長い。ヌクアロファからババウのネイアフまでは、国内線で約1時間30分。と現地までのアクセスは非常に悪い事を覚悟しなければならない。

**通貨:** パ・アング(トンガドル)T\$。1T\$=約81.74円(2004年3月31日現在)

**時期:** ザトウクジラがこの海域で見れるシーズンは、7月後半頃～10月頃まで。

**水温:** ザトウクジラの訪れる時期の水温は25度前後。他のザトウクジラが見れる海域と比べると比較的暖かい方。ホエールスイムに適したウエットスーツは3～5ミリのフルスーツ。風が強かったり、天候が悪かったりすると、船上の方が寒いので、風雨対策用の防寒着を用意して行くのが望ましい。

**言葉:** トンガ語の他にほとんどの場所で英語が通じる。

**時差:** 日本の+4時間。トンガの正午は日本の午前8時。

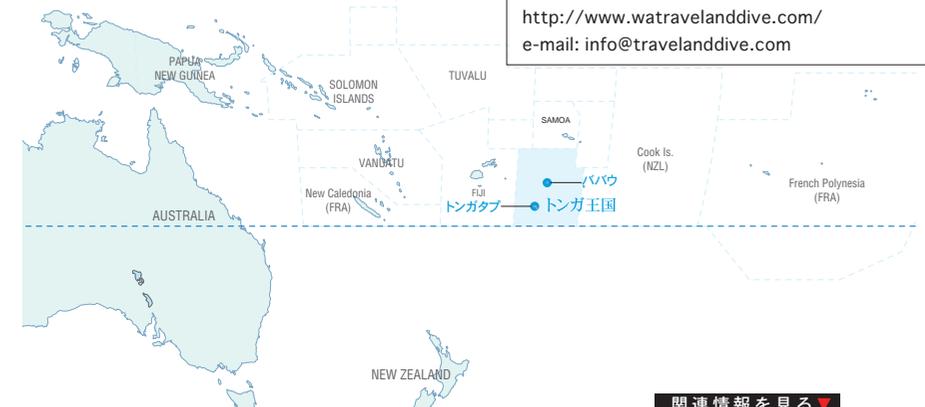
**電圧:** 240ボルト、50ヘルツ、0型、平ピン3つ又。(ハの字型でも可能)、ニュージーランド、オーストラリアと同じ。

**ビザ:** 30日以内の観光であれば必要ないが、帰りのチケットが必要。

**インターネット:** 島内にインターネットカフェがあり、接続可能。

トンガでのザトウクジラスイミングに関する情報は西オーストラリアトラベルアンドダイブセンターの高島氏まで。

<http://www.watravelanddive.com/>  
e-mail: [info@travelanddive.com](mailto:info@travelanddive.com)



関連情報を見る ▼

<http://www.watravelanddive.com/>